

歴史を創る！

——『大学生協の歴史と未来』の刊行に寄せて——

大学生協連会長理事 庄司興吉

『大学生協の歴史と未来』の刊行

今年初めての理事会です。新しくメンバーになっていただいた方、これから1年間よろしくお願ひします。昨年までここにいた方がたについては、夕方からの新旧交替懇親会で労をねぎらわせていただきます。継続の方を含めてこれから1年理事会メンバーの方、どうぞよろしく。

今日の挨拶として、「歴史を創る」というテーマでお話しさせていただきます。昨年は大学生協連法人化50周年ということで、和田専務をはじめ担当の小見君などの努力で、年末までに『大学生協の歴史と未来』という本を刊行できました。ご覧になった方も多いと思います。私も全体を拝見し、とくに戦後大学生協草創期の先人たちの苦労がよく分かるので、私たちはこれを義務として読まなければならないと思いました。

戦後、大学に戻ってきた、および新しく入ってきた学生たちは、とにかくまず食べなくてはならなかった。そこから始めて、ノートすら思うように手に入らない、本も手に入れるのが大変、という状況が続いた。そうしたなかで、人間の、生きて、学ぶ欲求をふまえて、大学生協づくりが行なわれ始めた。同時に、当時の学生たちには、新しい時代に新しい社会を創っていこうとする理想がみなぎっていて、彼らはそういう理念の力でも引っ張られていた。

人は欲求によって下から突き動かされながら、理念によって上から引っばられつつ、行動していくものです。マックス・ウェーバーの用語でいうと、利害 *Interesse* と理念 *Idee*、社会学者パーソンズの言葉でいうと、動機志向 *motivational orientation* と価値志向 *value orientation* に基づいて、人間の行動は行なわれていく。学生たちもまさにそうだったわけです。

戦後の欲望自然主義

食欲、物欲、性欲などはいつの時代も基本的には変わらないものですが、戦後日本では、凄惨な旧体制の崩壊のあと、自然状態に近い状況が現れ、さまざまな逸脱があったものの、基本的には健康な欲求が沸騰していました。藤田省三の言葉を使うと「欲望自然主義」です。そういう状況のなかで、大学に戻ってきた、および新たに入ってきた若者たちの欲求を基礎に、大学生協づくりが進められていったのです。

「闘う大学生協」

それに形を与えたのが理念でした。まず新憲法によって、平和、人権、民主主義という理念が与えられた。けれども、それを上回って強く働いたのは、戦前に一度はほぼ完全に弾圧され、戦後新たに復活した社会主義です。とくにマルクス主義的社会主義の理念が強烈でした。

学生運動が強くマルクス主義に影響されていたため、生協運動もそれに強く引っばられます。『思い出集』にも何人かの人が書いていますが、その影響のため「闘う大学生協」という理念・イメージが強かった。とくに学生運動のなかに反既成政党、反共産党、反社会党という勢力の影響が強まったため、生協運動も同じ影響をかなり受けました。

福武所感から現行「ビジョンとアクションプラン」へ

しかし、1960 年安保前後から 70 年安保前後にかけて、学生運動主流はセクト間抗争をくりかえし、しだいに力を弱めていきました。さらに高度成長による日本社会の「豊かな社会」化の結果、共産党系も社会党系もしだいに影響力を弱め、学生運動そのものも弱まっていきました。

しかし、大学生協の事業はますます必要とされるようになっていったため、70 年代以降も学生運動の余波による影響をこうむりながら伸び続けました。そういうときに出されたのが、1978 年の「福武所感」です。これは『歴史と未来』の最後に福武元会長の本から転載されています。

その骨子は、皆さんも良くご存知のように、それまでの学生中心の生協は大学構成員全体の生協に変わっていかなければいけない。そういう前提のもとに、大学とも協力して大学生協の発展をはかっていかなければいけない、というものでした。言葉は必ずしも同じではないのですが、大学生協の自立とか組合員の参加とかも実質的には盛り込まれています。

その後、1980 年代から 90 年代にかけて全国にそういう趣旨の生協が広げられてゆき、2006 年の「ビジョンとアクションプラン」につながってきたのです。

歴史および歴史認識の変化

この間に、大きな歴史および歴史認識の変化がありました。マルクス主義、とくにマルクス・レーニン主義の影響力が薄れて、その影響がマルクス主義の評価そのものにまで及んで、それを生み出してその基礎にあった市民社会化の流れが、はっきりと見えるようになってきました。

ソ連東欧システムが崩壊し、中国が経済成長を始め、旧植民地諸国、旧従属諸国も経済成長の軌道に乗り始めます。中南米諸国は 19 世紀の前半から後半にかけて多くは独立していたのですが、従属の構造のもとで発展ができない状況が続いていたので、そういう諸国のことを旧従属諸国と言います。旧植民地諸国ばかりでなく、旧従属諸国も発展し始めました。

こうしたなかで、旧ソ連東欧諸国が市民民主主義の体制をとるようになりましたし、インドを初めとして旧植民地諸国・旧従属諸国の多くは、もっと早くから市民民主主義の体制を取っています。中国やヴェトナムは、いわゆる「人民民主主義」に執着していて事実上自由な選挙を行なっていませんが、これら諸国の市民化もしだいに時間の問題となってきたと言っているといいいでしょう。

見えなかったことが見えてくる

そのなかで、大学生協が、戦後草創期から「福武所感」をへて今日の「ビジョンとアクションプラン」へと発展してきた道が、あらためて見えてきているように思います。その時々当事者に、必ずしも大きな流れが見えていたわけではありません。とくに「福武所感」を残された福武元会長は、大言壮語することの嫌いな方でした。口先だけで大きなことを言うのを嫌っていました。

それに較べると、教え子の庄司現会長は、逆に大言壮語ばかりしたがると見られがちですが、つねにその根拠を明らかにしようと務めてきています。庄司現会長は、今になって、自分がやろうとしてきたことが何であったか、ようやくわかってきたようにも思っています。

それは言うなれば、20 世紀から 21 世紀にかけての世界の巨大な社会変動を、千年から数千年のスパンで理解する視座を見出そうとしてきたということであり、それが

だいたい分かってきたということです。私が申し上げていることはすべて、基本的にはその線に沿うことなのです。

大学生協も市民（社会）化の一翼を担ってきた

『思い出集』を読んでいると、大学生協にかかわってきた人たちの多くが、この視座の転換を体で感じていることが分かります。何人かの人たちが「闘う大学生協」から「福武所感」をへて、現行の「ビジョンとアクションプラン」に至る過程で、「協同・協力・自立・参加」という路線が出て来たことに非常なショックを受けた、と語っています。

私たちはこのショックの意味を、前向きに、深く、理解しなければならないと思います。大学生協は、欲求に突き動かされ、理念に引っぱられながら、今日、地球的規模で可視化しつつある市民社会化の流れの一翼を担ってきたのです。

協同組合は労働組合とは違って、市民たちが選挙権をもって主権者たりはじめて以降に合う組織形態であり、市民たちが自主的に事業を行うという意味では、ある意味で労働組合よりも進んだものです。日本の大学生協は、それにつながることを、戦後のさまざまな混乱を含んだ歴史をつうじてやってきている。

そういう認識を新たにして、これからの大学生協のあり方と発展の道を考えていかなければなりません。そういう線上で、今日の理事会をはじめ、今年の活動もぜひよろしく願いし思います。

以上をもって私の挨拶とさせていただきます。

（全国理事会－１００１２３）